

# 中国大陸を旅する

—清代の地方志、圖、旅行記と日用類書—



上より  
展示①  
展示②



展示③

展示④



上  
展示⑤

左下  
展示⑥

右下  
展示⑦

このたび附属図書館に寄贈されました上塚司氏旧蔵歴史資料のなかから、氏が満鉄勤務時代に蒐集された清代の善本(貴重本)を中心に7タイトルを展示・ご紹介いたします。



平成17年10月24日(月)~11月22日(火)  
附属図書館2階貴重書展示コーナー

## 上塚司氏 略年譜

- 1890年 5月 熊本県生まれ
- 1912年 5月 南満州鉄道入社
- 1916年 8月 満鉄の社命により朝鮮半島全域および東満州地方を調査
- 1916年 9月 社命により北支および中支を調査
- 1918年 7月 これより2年間に渡り、満鉄社命と外務大臣・農商務大臣の委嘱により揚子江流域における商工業調査を行う
- 1920年 5月 熊本5区から第14回衆議院選挙に最年少(30歳)で当選(政友会)
- 1924年 6月 高橋是清農商務大臣秘書官となる
- 1925年 織田書店より揚子江調査時の紀行文『揚子江を中心として』を出版
- 1926年 4-5月 ブラジル、アマゾン地方を訪問(以後も、たびたび同地に渡航・滞在)
- 1927年 4月 高橋是清の大蔵大臣就任に伴い、大蔵大臣秘書官に任官
- 1932年 11月 日伯中央協会設立。自ら副会長となる
- 1953年 5月 衆議院外交委員長就任
- 1954年 2月 日本海外協会連合会(現JICAの前身)の設立総会で副会長に選出
- 1955年 2月 政界から引退
- 1955年 6月 ブラジル政府より南十字星大勲位章受章
- 1965年 4月 勲二等瑞宝章受章
- 1978年 10月 死去(88歳)

# 展示資料解説

選定・解説：本学外国語学部教授 臼井 佐知子

## 展示①

### 『示我周行—天下路程』六巻

乾隆三年(1738)刊 妙因居士撰 文奎堂藏版

現代日本でいえば「旅行ガイド」、「冠婚葬祭入門」、「家庭の医学」、「方位学」から、「訴訟文書の書き方」などの内容をすべて、あるいは一部を記した書を「日用類書」という。これらの「日用類書」のうち、科挙受験や官僚として、とりわけ商人として外地へ赴く者のためのいわばガイド・ブックの類、またそうした内容を含んだ類がある。これらを現在「商業書(または「商人書」)」と称している。これらの「商業書」のほとんどには、ある地点からある地点への路程が示されている。また、水路・陸路の路程のみが記されたものもある。『示我周行』は後者である。本書には、江南省城(現在の南京市)から北京への路程を軸として、上集には、各省城(省政府所在地)から最終的に北京に至る道筋が記されており、中集には、明清時代の経済の中心地江蘇省蘇州から安徽省徽州(現在の黃山市)までと、兩淮の塩の積み出し地である江蘇省儀真県から徽州までの路程、徽州から金華府など浙江省各地への路程やその他の路程、下集には、浙江杭州、江西、福建省を中心として、廣東、四川、貴州各省内の各地間の路程が記されている。

中国では、乾隆年間(1736-1795)以前に刊行された書籍を「善本(=貴重本)」として分類し(明代以前に刊行された書籍を「善本」という場合もある)、多くの図書館で特別に保管している。本書はその「善本」に属す。

## 展示②

### 『峽江救世船志』十五巻・『行川必要』一巻

光緒九年(1883)刊 賀縉紳撰

峽江とは、四川省奉節県以東、現在ダム建設で有名な三峡あたりの長江をいう。兩岸は高い絶壁に囲まれ、河水も渦巻いている。この峽江の船上から見た兩岸の風景と、沿岸の地の廟を描いた絵図集が『峽江救世船志』十五巻であり、湖北省宜昌府(現在の宜昌市)東湖県西壩から四川省重慶府(現在の重慶市)巴県までの主要な船着場一覧を記載した『行川必要』一巻がそれに附されている。『峽江救世船志』の序に『行川必要』を附すとあるところから、はじめから併せて編纂されたものであることがわかる。なお、『峽江救世船志』の序には長江が松潘(現在四川省チベット族・羌族自治州の州都、世界遺産パンダの故郷九寨溝への基点となる地)の北を源流とし、四川省でのその後の流れや名称、距離について書かれている。

## 展示③

### 『廬山志』十五巻

康熙五十八年(1719)刊 毛徳琦重訂

地方志とは、上は省に始まり、次いで府(州)、次いで県(州)、さらに下は鎮や村に至るまでの各地方単位が、その地の自然や風俗、物産、古蹟、賦役(税役)、兵防、建築物、人物などの項目をたてて記載したものであり、その地の百科全書ともいえるべきものである。その中で、とくに風光明媚で著名な山についても、地誌が編纂されている。『廬山志』、『南嶽志』、『峩眉山志』などがそれである。これら山志は地方志の体裁で編纂されているが、賦役や名官、兵防など行政に関わる記述は相対的に少なく、山の峰など自然や寺や廟などを始めとし、文化についての記述が詳しい。

廬山は江西省北部、九江市の南にある。多くの峰をもち風光明媚な避暑地でもある。白居易の詩で有名であり、清少納言も引用した香炉峰は廬山にある。本書は康熙五十八年(1719)に印刷刊行されたものであり、「善本」すなわち貴重本である。

## 展示④

### 『南嶽志』二十六巻

乾隆十八年(1753)刊 李元度撰

南嶽とは湖南省衡山県の北西にある衡山山脈の主峰衡山のことであり、別称寿岳ともいう。ちなみに、中国五岳とは、中嶽嵩山(河南省)、東嶽泰山(山東省)、西嶽華山(山西省)、北嶽恒山(山西省)そして南嶽衡山である。

構成は、巻之一：星次、圖考、形勝、祀典、巻之二：書院、寺觀、物産、田賦、古蹟、巻之三：碑碣、勝遊、徑路、巻之四：仙釋、紀異、巻之五～巻之八：文藝、となっている。

本書も乾隆年間の刊行であり、「善本」に相当する。

## 展示⑤

### 『雲南府志』二十五巻

康熙三十五年(1696)刊 張毓碧修・謝儼纂

『雲南府志』は、雲南省雲南府の地方志である。「凡例」には次のような記載がある。雲南府の旧志は、明代萬曆元年(1573)に編纂されたが、以後戦乱によって散逸し伝わっていない。たとえ伝わっているものがあっても皆完全ではないし、必ずしも確かなものではない。そこで今、雲南省の新旧の省志(の記述)により、そのほか古老の見聞や士大夫(が書いた文章)の記載を(併せて)斟酌し、優れたものにする、というものである。序文八編のうち、四編は康熙三十三年に、三編は康熙三十五年(1696)に書かれており、一編は不明である。

内容構成は、巻一、二は地理志、巻三、四は建設志、巻五は沿革志、巻六、七、八は賦役志、巻九は学校志、巻十は選舉(=科挙)志、巻十一は官師(地方官など)志、巻十二、十三は人物志、巻十四は封建志(藩鎮)、巻十五は兵防志、巻十六は祀典志、巻十七は方外志(仏教と道教関係)、巻十八～二十八は藝文志、巻二十五は雜志、巻二十六は補遺志である。これも「善本」である。

## 展示⑥

### 『峩山圖說』二巻

光緒十七年(1891)刊 黃綬英撰・譚鐘嶽繪

地方志には、都市の地圖や景観の良い場所を描いた図が加えられる場合が一般的である。とくに山や風光明媚な地については、別途圖、圖說、圖志が編纂されることがある。『峩山圖說』は、四川省成都の南にある峩眉山を描いた絵圖集であり、光緒十四年(1884)の「峩山志圖說序」、序に対する注、そして巻一の、「峩山記」、「附録紀勝雜詩三十六首并序」、總圖一と各部分圖三十張、巻二の、各部分圖二十三張と「金頂祥光景」十張から成る。「附録紀勝雜詩三十六首并序」には、光緒十二年(1886)に譚鐘嶽が峩山に登って絵圖を描き朝廷からの命令で絵圖を進呈することになったこと、翌年總圖を描いたことなどが記されている。また、總圖には、峩眉県の県城(県の行政府所在地)から頂上まで百二十里(約60キロメートル)であり、圖には、山道、川、寺宇などの古蹟をおよそ描き入れてあると書かれている。

## 展示⑦

### 『鈍齋東遊日記』一冊

宣統元年(1909)刊 賀綸夔編述 商務印書館

本書は、1895年から四川省成都に住む賀綸夔という人物の「東遊」すなわち日本訪問日記である。賀綸夔は宣統元年(1909)12月14日に成都を出発し、船で長江を下るが、28日には重慶に着き上陸して友人を訪問したりし、年を越して閏2月に漢口から日本郵傳会社の船に乗り日本に渡っている。主要な内容は日本での見聞であるが、成都から長江を下っていく途中の船着場の名称などの記述も詳しい。比較的新しい書であり、商務印書館の印刷出版によるものであるから出版された冊数は少なくないと思われるが、少なくとも日本の主要な漢籍収蔵図書館には管見の限りでは見出せない。